

小塩

禪竹作

前

ワキ 都の人

シテ 樵の翁

後

ワキ 前に同じ

シテ 在原業平

地は 山城

季は 三月

ワキ次第

「花にうつろふ嶺の雲。く。かゝるや心なるらん。

詞

「かやうに候ふ者は。下京辺に住居する者にて候。

さても大原野の花。今を盛りなる由承り及び候ふ
あひだ。若き人々を伴ひ申し。唯今大原山へと急
ぎ候。

サシ

「面白やいづくはあれど所から。花も都の名にし負
へる。大原山の花桜。

歌

「今を盛りと木綿花の。く。手向の袖もひとしほ

シテ一声

に。色そふ春の時を得て。神もまじはる塵の世の。
花や心にまかすらん。く。

「しをりして。花をかざしの袖ながら。老木の柴と
人や見ん。

サシ

「年ふれば齡は老いぬしかはあれど。花をし見れば
物思ひも。なしとよみしも身の上に。今白雪を戴
くまで。光りにあたる春の日の。長閑けき御代の
時なれや。

歌

「散りもせず。咲きも残らぬ花ざかり。く。四方
のけしきも一しほに。にほひ満ち色にそふ。情の
道にさそはるゝ。老な厭ひそ花心。く。」

ワキ詞

「ふしぎやな貴賤群集の其中に。ことに年たけたる
老人花の枝をかざし。さも花やかに見え給ふは。
そも何くより来り給ふぞ。」

シテ

「思ひよらずや貴賤の中に。わきて言葉をかけ給ふ
は。さも心なき山賤の。身にも応ぜぬ花ずきぞと。」

お笑ひあるか人々よ。姿こそ山のかせきに似たり
とも。心は花になればこそ。なさばならめや心か
らに。」

地

「をかしとこそは御覧ずらめ。よしや此身は埋木の。
朽ちは果てし無や心の。色も香も知る人ぞ。知ら
ずな問はせ給ひぞ。」

ワキ詞

「あら面白のたはぶれやな。よも誠には腹立ち給は
じ。いか様故ある心言葉の。奥床しきを語り給へ。」

シテ詞「何と語らん花盛り。いふに及ばぬけしきをば。いかゞは思ひ給ふらん。

ワキ「げにく妙なる梢の色。うつろふ影も大原や。

シテ詞「小塩の山の小松が原より。煙る霞の遠山桜。

ワキ「里は軒端の家ざくら。

シテ「匂ふや窓の梅もさき。

ワキ「あかねさす日も紅の。

シテ「かすみか。

ワキ「雲か。

シテ「八重。

ワキ「九重の。

地「都辺は。なべて錦と為りにけり。く。桜を織ら

ぬ人し無き。花衣着にけりな。時も日も月もやよひ。逢ひにあふ詠めかな。げにや大原や。小塩の山も今日こそは。神代も思ひ知られけれ。く。

ワキ詞「かゝる面白き人に参りあひて候ふ物かな。此まゝ

御供申し花を詠めうずるにて候。又唯今の言葉の
すゑに。大原や小塩の山も今日こそは。

詞

「神代の事も思ひ出づらめ。今所から面白う候。是
は如何なる人の御詠歌にて候ふぞ。

シテ詞

「事あたらしき問事かな。此大原野の行幸に。在原
の業平供奉し給ひし時。かたじけなくも後の御事
を思ひいでゝ。神代の事とはよみしとなり。申す
につけて我ながら。空おそろしや天地の。神の御

代より人の身の。妹背の道は浅からぬ。

地

「名残をしほの山深み。く。のぼりての世の物語。

かたるも昔男。あはれ旧りぬる身の程。歎きても
かひなかりけり。歎きてもかひぞなかりける。

ロンギ地

「げに山賤のさしもげに。しわふるびとゝ見ゆるに
も。心ありける姿かな。

シテ

「心知らればとても身の。姿に恥ぢぬ花の友に。馴
れてさらばまじらん。

地 「まじれやまじれ老人の。心若木の花の枝。

シテ 「老隠るやとかざゝん。

地 「かざしの袖を引き引かれ。このもかのもの陰ごと
に。

シテ 「貴賤の花見。

地 「輿車の。花のながえをかざしつれて。よろぼひさ
ぞらひ。とりぐにめぐる盃の。天も花にや酔へ
るらん。紅うづむ夕霞。かげろふ人の面影。あ

りと見えつゝ失せにけり。く。(中人)

ワキ詞

「ふしぎや今の老人の。唯人ならず見えつるが。さ
ては小塩の神代の古跡。和光の影に業平の。花に
詠じて衆生済度の。姿顕はし給ふぞと。

歌

「思ひの露もたまさかの。く。光りを見るも花
心。妙なる法の道のべに。猶も奇特を待ち居たり。
く。

後シテ

「月やあらぬ春や昔の春ならぬ。我身ぞ本の身も知

らじ。

ワキ 「ふしぎやな今までは。立つとも知らぬ花見車の。
やごとなき人の御有様。是は如何なる事やらん。

シテ 「げにや及ばぬ雲の上。花の姿はよも知らじ。

詞 「有りし神代の物語り。姿顕はすばかりなり。

ワキ 「あら有難の御事や。他生の縁は朽ちもせで。

シテ 「契りし人も様々に。

ワキ 「思ひぞいづる。

シテ 「花も今。

地 「今日こずは。あすは雪とぞ降りなまし。く。

消えずはありと。花と見ましやと詠ぜしに。今は

さながら花も雪も。皆白雲の上人の。桜かざしの

袖ふれて。花見車くるゝより。月の花よ待たうよ。

地クリ 「それ春宵一刻価千金。花に清香月に陰。惜しまる
べきは只此時なり。

シテサシ 「思ふ事いはで唯にや止みぬべき。

地

「我にひとしき人しなければ。とは思へども人しれぬ。心の色はおのづから。思ひ内より言の葉の。露しなぐに洩れけるぞや。」

クセ

「春日野の。若紫のすり衣。しのぶの乱れ。限りしらずもと詠ぜしに。陸奥の忍ぶもぢずり誰故。乱れんと思ふ我ならなくにと。よみしも紫の。色に染み香にめでしなり。または唐衣。着つゝ馴れにし妻しあれば。はるぐきぬる旅をしぞ。思ふ心

の奥までは。いさ白雲のくだり月の。都なれや東山。是もまたあづまの。はてしなの人的心や。

シテ

「むさし野は。今日はな焼きそ若草の。」

地

「夫もこもれり我もまた。こもる心は大原や。をしほにつゞく通路の。ゆくへはおなじ恋草の。忘れめや今も名は。昔男ぞと人もいふ。」

シテ

「むかしかな。 (序の舞) 」

ワキ

「昔かな。花も所も月も春。」

地 「ありし御幸を。

シテ 「花も忘れじ。

地 「花も忘れぬ。

シテ 「心やをしほの。

地 「山風ふき乱れ。散らせや散らせ散りまよふ。木の

もとながらまどろめば。桜に結べる。夢かうつゝ
か世人定めよ。く。寝てか覚めてか春の夜の月。
曙の花にや残るらん。